

2018年度学内研究助成 成果報告書

① 報告者所属・氏名

生活科学部現代生活学科 須賀由紀子

② 事業名

地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築
～ 高大連携プログラムの発展的展開 ～

③ 事業の目的

少子高齢化、長寿社会、家族の変容など、様々な社会変革を背景にして、これからの暮らしの受け皿として「地域自立社会」を形成していくことは、重要な地域課題である。今後の地域政策においては、地域づくりに主体的に参画しようとする市民意識を醸成し、地域を支える社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）にいかにか厚み持たせていくかが大切である。そのためには、地域に目を向ける機会を、若い時から意識的に作っていく必要がある。

この観点から、地域社会の一員としての意識の醸成をねらいとする、まちづくりのプログラムを構築したいと考えた。若年から高齢者に至るまでの多世代が地域に関心を持ち、地域とかかわる暮らしの豊かさを作り出す「主体者」となる社会づくりに向けて、本事業では、若い世代の意識づけのプログラムの構築を目的とした。

④ 事業実績・研究成果（具体的に）

2017（平成 29）年度に、江戸川大学・実践女子大学大学間連携事業として、神奈川県総合科高校の生徒を対象に、大学生と高校生と一緒にまちづくりを考えるまちあるきプログラムを行い、若年層が地域に興味を向けるプログラムとしての手応えを得た。

2018年度事業においては、このプログラムの標準化に向けての検証を行った。具体的には、地域づくりについて学ぶ大学生が、地域の印象をはかるSD法とインタビュー法を組み合わせたまちあるきのプログラムを企画し、このプログラムにより、参加者にどのような意識が生まれるか、対象や場を変えて検証し、本プログラムの可能性を検討した。

【実施したプログラム】

以下、4つのプログラムを実施した。

- 1) 「高大連携サマーキャンプ 2018」（地元以外の高校生を対象）
- 2) 「高大連携サマーキャンプ 2018」の地元住民への還元
- 3) 地元中学生を対象とした大学生プログラム① ～児童館との連携～
- 4) 地元中学生を対象とした大学生プログラム② ～公民館および中学校との連携～

1) 実施プログラム①「高大連携サマーキャンプ 2018」

実践女子大学及び江戸川大学のチームが共同して、高校生が地域に目を向けるためのまちあるきプログラムを実施した。内容は、調査地の JR 豊田駅南側のまちなみの特徴を「レトロ感」から捉え、SD 法およびインタビュー法を用いて高校生と一緒に歩き、新たなマップ（レトロマップ）を作ることで、来訪者である県外高校生に地域に目を向けてもらうプログラムとし、地域への意識づくりにどのような効果があるかをはかった。

〈プログラム実施〉

- 実施日：2018年8月2日（木）～8月4日（土）※フィールドワークは8/3（金）に実施
- 場所：八王子大学セミナーハウス 及び JR 豊田駅南側エリア
- 参加者：高校生6名、大学生6名

2) 実施プログラム②「高大連携サマーキャンプ2018」の地元市民への還元

実施プログラム①の高大連携のプログラムは、日野市民にご協力いただき、江戸川大学および実践女子大学による合同勉強会時に、対象調査地の実踏をした上で実施されたものであった。そこで、協力市民に対して、高校生と大学生が行ったまちあるき結果をフィードバックした。その結果、高大連携で行ったまちあるきプログラムに関心が寄せられ、市民向けのまちあるき企画にも活かされることになった。結果的に、大学生を媒介として、地域に目を向ける多世代のつながりが生まれた。

〈プログラム実施〉

- 日野市二中地区アクションプラン・ブランニング第6弾として実施
プログラム名「名もない坂巡りと TOYODA スイーツ」
- 実施日：2018年11月17日（土）13:00～15:30
- 場所：JR 豊田駅周辺（日野市二中地区アクションプラン「ブランニング第6弾」）
- 参加者：市民約25名 大学生2名

3) 実施プログラム③「地元中学生を対象とした大学生プログラム①～児童館との連携～」

「高大連携まちあるきプログラム」を、地元中学生を対象に応用して行った。このまちあるきでは、「地域への愛着形成」ということに問題意識を置き、地域の大人が地域の「居場所」（おすすめポイント）と知っているところと、中学生自身が自分達にとって地域の「居場所」（おすすめポイント）と知っているところを歩き、両者の「居場所」の違いを知ることによって地域に対しての気づきを持ち、まちへの愛着をはかることに着眼点を置いた。当日は、児童館職員も同伴して、まちあるきを行った。

〈プログラム実施〉

- 実施日：2018年10月20日（土）15:00～17:00
- 場所：日野市しんめい児童館周辺
- 参加者：中学1、2年生 男子4人、大学生2名
- 配布物：プログラム内容と地域を知る方法としてSD法とインタビュー法の説明を載せた表紙、SD法調査用紙11枚、インタビューメモ用紙、まちあるきルートの記載されたマップをバインダーに綴じて置き、すぐ始められるようにした。終了時には、まちあるきでは説明することができなかつたお店や施設の案内用紙とアンケートを配布した。

4) 実施プログラム④

「地元中学生を対象とした大学生プログラム②～公民館および中学校との連携」

本プログラムは、日野市中央公民館と日野市立第二中学校の協力を得て、地元中学生が自分達が日頃生活をしている地域に目を向け、地域について考えるプログラムとして実施に至った。大人が思う「居場所」（おすすめポイント）と、中学生にとっての「居場所」（おすすめポイント）を観察ポイントとして、SD法を実施して地域の居場所感を確かめ、また、

この地域の中で特徴ある活動や仕事をしている場所で、インタビューを行って、地域に目を向ける内容を盛り込んだ。

■実施日：2018年12月2日（日）9：00～13：00

■場所：日野市立第二中学校周辺

■参加者：中学2年生 女子6人 大学生2名

■配布物：プログラム内容と地域を知る方法としてSD法とインタビュー法の説明を載せた表紙、SD法調査用紙8枚、インタビューメモ用紙をバインダーに綴じて置き、すぐ調査が始められるようにした。その他、まちあるきルート記載用のマップ、黒川清流公園パンフレットを別途配布し、終了時には、まちあるきでは説明することができなかつたお店や施設の案内用紙とアンケートを配布した。

【研究成果】

本研究では、少子高齢化、人口減少が本格的にすすむ中で、地域社会を支える上で大切な社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を、いかに循環的に形成しうるかを問いとして、実験的取り組みを行った。地域を支えるには、「地域への愛着」を感じる人を育てることが必要である。そのための方法論として、地域の人や自然、歴史、景観、ライフスタイルなどに目を向けるきっかけとなる「まちあるき」を採用した。そして、「まちあるき」を実施する主体として「大学生」に着目した。大学生の多くは、在学中に通う（または、一時的に住む）地域に対して、「来訪者」である。卒業と同時に、その地域から縁遠くなることが多い。そうした来訪者が、地域に目を向け同化していくプロセスを経験する中で、地域の大切さを知り、地域の暮らしへの意識を持っていく。そのことが、その後の地域の社会関係資本の礎となると考えられるからである。また、大学生は、中学生・高校生と勤労世代の大人の間位置し、生活者の意識に近づきながらも、子どもの遊び心を遊ぶことができる。この大学生を介して、中高生と大人をつなぎ、彼らの関心を地域につないでいく意義は大きい。

今回の実践プログラム①②では、市民のまちあるきプログラムに参加した大学生が、地域の「来訪者」としての視点から感じた対象地域の価値を、高校生に伝えるまちあるきルートを作り、大学生の学修を活かして、SD法とインタビュー法を取り入れたまちあるきを行った。その結果、このプログラムは、「来訪者」であった高校生に、地域のまちなみやライフスタイル、暮らし方に目を向けるきっかけとなる方法であることが確認された。さらに、このプログラムで得た高校生の見方を、大学生が媒介となって、今度は、対象地域の市民にフィードバックした結果、地域の価値共有ができる、新たなまちあるきプログラムが生まれた。このプログラム実施により、地域に関心を寄せる新たな来訪者が増え、日頃から地域の一員として存在している店舗と地域の人々とのつながりも生まれた。

実践プログラム③④では、高校生とのまちあるきを行った大学生が、今度は、地域の児童館、公民館および中学校の協力を得て、中学生のための独自のまちあるきのルートを作り、SD法とインタビュー法を用いて、中学生とのまちあるきを実施した。参加した中学生からは、「自分の地元を知るきっかけとなった」「自分の地元をより知ることができた」「今まで気づけなかつたよさに気づけた」といった意見を得ており、大学生（＝地域を異化するまなざしを持つ）が媒介となって、まちあるきを通じて、大人と中学生・高校生がつながり、地域を愛する社会関係資本を循環的に形成していく可能性が確認された。

以上のように、来訪者でありながら地域について学ぶ「大学生」が媒介して、地域の大人と定住者の一員である高校生・中学生をつなぐことにより、地域との関係を豊かにつくって

いく人を増やす可能性が確認できた。大学生と地域をつないで行うまちあるきは、テーマパークのアトラクションのような一過性のものではなく、様々な場所や人を対象として継続できるものであり、持続的・循環的に生成していく社会関係資本（ソーシャルキャピタル）として位置づけられよう。

しかしながら、まちあるきの難点は、手間ひまをかけた準備や振り返りが必要なこと、参加者の安全への配慮、実施日の天候によしあしに左右されるなど、「そう簡単にはできない」ということである。本事業に参加した大学生からも「下見をもっとすればよかった」「時間不足」「高校生に集中してやってもらうことに苦労した」「わかりやすく伝えること」「SD法の分析」などが難しさとして挙がっている。そうした難点を超えて、今後の地域の社会関係資本の形成と位置付けるまちあるきを継続していくためには、地域自立社会づくりを真摯に捉える行政や地域の様々なステークホルダーとの協力関係などが必要となろう。

2018年度の取り組みでは、様々な制約の中で、限られた人数や場でしかできなかったが、地域の社会関係資本の循環的形成に向けて、さらに実践を重ねて、本プログラムの可能性を探求していきたい。

⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

■論文掲載

- ・土屋薫・須賀由紀子「地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築：まち歩きによる地域への愛着意識の醸成に向けて」（江戸川大学紀要第28号、2019）

■学会発表

- ・須賀由紀子・土屋薫「地域への愛着を育むまちあるきプログラムの検討～地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築に向けて～」(日本レジャーレクリエーション学会第48回大会発表、2018)
- ・福岡稔・伊勢康平、鈴木歳穰、伊東那奈、和田泉穂、土屋薫、須賀由紀子「まち歩きプログラムにける景観評価方法の導入」(日本レジャーレクリエーション学会第48回大会発表、2018)

■報告書

- ・江戸川大学・実践女子大学大学間連携事業報告書「地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築 ～ 高大連携プログラムの発展的展開 ～」2019

■地域連携

- ・日野市しんめい児童館との連携
- ・日野市中央公民館との連携（日野市中央公民館のHPに掲載）・日野市立第二中学校の協力

⑥ 今後の展開・継続性について

このプログラムの難しさとして、景観をはかるものさしとなるSD法をまちあるきに活用する点がある。そこで、目に見える景観の中に捉える「地域の価値」を言語化する手法の開発を行い、これをコアプログラムとするまちあるきプログラムを実施する。このコアプログラムは、地域の価値を言葉で捉え、異世代同士や、地域の住民と来訪者とが地域の魅について深く交流しあう内容で検討する。開発するコアプログラムを、これまでのまちあるきプログラムに加えることで、地域の価値への気づきがより具体的なものとなり、住みやすいまちについて考える総合的な地域学習プログラムとして提示できることが予想される。さら

に、このプログラムを、いろいろな世代や場でもアレンジして実験的に行うことにより、プログラムの汎用性を検証し、プログラムの標準化をめざす。